

Title	土方透氏報告「差異に生きる＝共に生きる 子どもとおとな」（＜児童＞における「総合人間学」の試み研究）
Author(s)	田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-No.5 : 9-11
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2899
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

＜児童＞における「総合人間学」の試み研究

土方透氏報告「差異に生きる＝共に生きる 子どもとおとな」

田澤 薫

「子どもの『領分』研究」を共通テーマとする2010年度の＜児童＞における「総合人間学」の試み研究会であるが、その第3回研究会が12月15日(水)18:00～20:00、聖学院大学4号館第二会議室において開催された。研究会では、土方透氏（聖学院大学政治経済学部長）に「差異に生きる＝共に生きる 子どもとおとな」と題してご報告をいただき、その後、参会者との間に活発な議論がなされ時間を一杯にして会を閉じた。

土方透氏は、2010年度のはじめに刊行された清水堯著『^{きょう}今を生きる 子どもたちと共に』（学校図書）の制作に関わっておられる。著者の清水氏は土方氏の小学校時代の恩師であり、清水氏は長年にわたる初等教育「理科」における実践をまとめられるにあたり、土方氏との研究会を重ねられたという。いうまでもなく、本研究会が関心を寄せる「子どもの『領分』」での実践は、言語化することが極めて難しい。清水氏が言語化の作業に取り組まれる中で、土方氏の理論がどう関わり影響したのかは、大いに興味のあるところである。研究会ではその辺りを解き明かしていただくことをお願いし、叶えていただいた。ご報告の概要は以下の通りである。

社会学者ルーマン（N.Luhmann）は多筆で難解であることで知られるが、その著作のなかで教育に関するものは、日本では最も紹介が遅れている領域である。晩年の清水堯先生は現象学に関心を持たれていたが、清水先生の実践論を書き残す作業に当たる中で、その理論的背景の部分をルーマン理論も引き受けた面がある。清水先生との間で議論されたことを紹介したい。

ルーマンの教育論は「子どもがメディアである」という言説に始まる。清水先生の著作は「子どもたちと共に ^{きょう}今を生きる」を主題としている

が、ここで言われている差異とは何か。当然、子どもと大人の差異であり、あるいは教師と児童との差異である。その差異に生きるということと、その差異として違いがあるところのものとしての子どもと大人が共に生きるということは矛盾である。言い換えれば、違ったものが同時に生きるということは矛盾であって、この矛盾を論理整合的に語られるかどうか1つの論点となる。

まず、「子どもなる人間それ自体というものは存在しない」というテーゼを明らかにしたい。ルーマンの晩年の著作に「社会学と人間」という論文があるが、その中でルーマンは「人間なんてやっているから学問はだめなんだ」と「人間なんて要らない」と主張している。それをもじると、「子どもなる人間」という者は存在しない、子どもはメディア（媒質）である、となる。

問題を浮き彫りにするために、2つのパラドクスを提示したい。

1つは子どもというイメージで、「弱き子ども」「小さな人間」「補助を必要とする人間」「これから成長する人間」というものがある。それに対して、あえて言うならば「強き子ども」がある。例えばワーズワース（W.Wordsworth）は「子どもは大人の父である」とうたい、教師が「子どもから教わる」と言う場合もある、ここでは、弱き子どもと強き子どもというものが同時に語られている。これは分裂病であって、物事を何も説明していない。

パラドクスの2は、教育が子どもと共に考えることであるとするならば、他者と共に考える、つまり異質なものと同質に考えるということも完全に矛盾である。

だから、この2つのまったく相反することが1つの事態に起きているということは、どちらか片一方は間違っているか、この問題の立て方が全部

間違っているかである。これは問題の立て方が間違っているだろう。子どもを人間だとしていることが間違いであるというのが私の結論である。

幼時体験に照らして考えるのは、子どもは自分がどういう扱いを受けているかとそれ自身においてはわかっていないのではないか、ということである。つまり、議論は、子どもという実体、子どもという存在、さらには子どもという実存があって、その中で何か起きているとすることのうえに成立している。「実存の存在論的局面ではなく、実存をめぐる現象学的な局面に注目」して議論しようという話を清水先生とした。

清水先生の著書は、「遊び」「他者としての自然との出会い」「模倣から創造へ」「課題意識」「志向性」「自らの心に火をつける」「課題意識を展開させる」「学校は自らを超えることを学ぶところである」「子どもに学べる教師=子どもの『考え』を考える（共に未知を創り合う）」と章立てされている。この本では、子どもに対する、あるいは子どもにおける教師の位置に注目していただきたい。この位置の問題は、実は「子どもという人間はいない。そうじゃなくてメディアである」といった論点に大きく関係している。

「子どもとは誰か」という議論では、そのときの子どもを観察している観察者の位置に注目する必要がある。例えば、子どもはプラトンの言うところの「蠅の塊」である。何でも刻印できる塊なのか、あるいは啓蒙されるべき存在なのか、あるいは理性の自律を促されるべき存在なのか。同時に、自律的個人としての子どももいる。権利主体としての子どもであり、「子どもの権利条約」には自己決定をする子どもが描かれておりパターンリズムと完全に相反する。どちらにしても、大人でも子どもでもない、「隠された第3項」として観察者の立場・位置に留意することで見えるものがある。

また、「異文化」としての子どもという場合、異文化理解に対する文化人類学の反省としてレ

ニ・リーフェンシュタールの例にあるように、ユーロセントリズムから離れていない「臭い」を感じる。別の文化体系に対する強い憧憬と、ある尊敬の念、あるいは畏敬の念をもって接したものの、やはりどこかで野蛮だ、野性の思考だと、自らの文明の思考を基準にした支配的な価値観を含んでいるのではないか。

子どもの定義。その子どもを画定する位置というものはどこであるか。つまり誰から見て未発達であり、誰から見て人格の主体でありうるか。そして子ども自身はどうか。子どもの限界は子どもが見ることができない。大人の限界は大人が見ることができない。中世は、神は子どもの限界も大人の限界も見ることができたという理論である。近代は、神は子どもの限界も大人の限界も見ることができると言う人間の言明があることを指摘した。そうすると、「子どもの立場で考える」という大人の言明というものは、支配以外の何者でもない。論理課題として言うならば、近代が生み出したパラドクスである外部観察の欺瞞の問題を解決しなくてはならない。では、子どもとはどういう事態か。

同一性から差異性の理論によれば、大人とは何、子どもとは何と言わずに、違いを問う。ここで異質性と言った場合、つまり存在の差異ではなくて、関係の差異が問題となる。例えば胎児をめぐる、法律的に、生まれてきてほしい胎児は人間で生まれてきてほしくない胎児は物である。つまり、胎児という実体が問題なのではなく、母親と胎児との関係が論点である。だから、子どもが存在するのではなく、子どもとして現象するものの構成的認識の問題である。

様々な場面で、外側の立場を我々は今まで隠し持ってきたが、外部からの限界画定は不可能ではないか。子どもの限界を問う場合、子どもを定義づけるのではなく、自らの発達により自らの限界を開発していく自己言及性のある存在が子どもである。つまり、知識や考え方を教えるのではなく

て、子どもが考えるということを教える。ここでは上位から教える、授ける、指導するのではなく、アリストテレスの「ここにいるんだぞ」というアリストテレス的なもの、自己自身が眺められたものに包まれているという一体感を近代の見直しと共に生起している現象である。

子どもという現象の特殊性については、「子どもとは」という問題の立て方をやめて子どもが子どもであることの成立状況を問うてみる必要がある。つまり、子どもを子どもとして扱うコミュニケーションの継続的展開はいかにして可能になるか。子どもにおいて実際に生ずることが問題なのではなく、子どもというメディアにおいて教育の成功や失敗を積み重ねるとさらに教育可能であると思えるのであれば、子どもとの接点は持続的に展開されていくのではないか。だから、子どもは、その場合には教育の文脈を構成するメディアとして捉えるべきだと考えたが、それは教育の特性であって子どもに限定されない。

だとすると、子どもの特質は、潜在的に可能的なるものの現実化を可能にするコミュニケーション過程を生成する媒質であろう。高度の異質性、それから予測不可能性、その子ども自身のもつ不安定要素こそが子どもを子どもとして成立させる継続的なコミュニケーションを構成している。今ある不安定要因をどの不安定要因に変えていくかと試みるなかで、コミュニケーションは展開する。そうすると、恐らく子どもをメディアとする。子どもをメディアとするコミュニケーションの特質性は、家族とか学校での軋轢やコンフリクトの回収を敵対的ではなく、融和や強化、つまりコミュニケーションに回収していることにみられる。つまり家族の中では愛情、学校では指導ということに回収しているのは、子どもをメディアとするコミュニケーションをしていかないからと考えられる。

弱き子どもと強き子どもが併存しているという第1のパラドクスは、相互行為のプロセスとして

現象する子どもでもある。主観的に構成された客体との相互浸透的空間で機能する。つまり可能なるものの現実化可能性。つまり可能的現実態としての子どもというものとしてあるならば、それは弱きものでありかつ強きものである。

異者と共に同質に考えるという第2のパラドクスは、自らと子どもとの差異を子どもとの協働において表現できる関係を示す。これが最近のシステム論である。つまり認知的に開き、規範的に閉じられている。ここには子どもに対する相対立する要求、つまり自律と支配を同時に可能にするロジックができるはずである。だから、これは総じて子どもがメディアであるということを示す。そして、子どもがメディアであるということを認めることが、子どもとの差異に生きるということが可能にする。子どもとの差異に生きるこそが子どもと共に生きることである。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科准教授）



右が発表者の土方透氏。参加者は24名であった。